

シネマをいろいろる病と医療-3

食道癌で往った命が伝える“生きる力”

映画・医療ライター 小 守 ケ イ

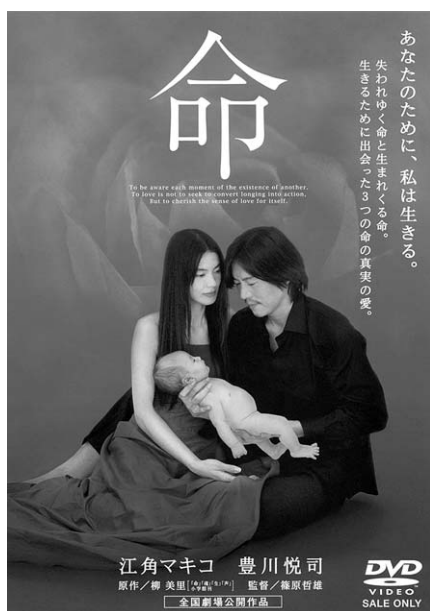
「東さん、病院へ行ったほうがいいですよ」。1999年初夏、芥川賞作家の柳美里（ゆうみり）が、師であり恋人でもあった演出家の東由多加（ひがしゆたか）に会いに行くと、彼は「食べると吐くんだ」と痩せていて、驚いた柳は東に受診を勧める。既婚男性との恋愛で妊娠した柳が、産むべきかを相談に行った時のことだ。

数日後、柳に引きずられて病院へ行った東に不治の癌が告知される。「食道癌が原発巣で、肺、肝臓、リンパ節に転移がある。手術は無理で、抗がん剤と放射線治療を行う。治療しないと1ヵ月、治療すれば8ヵ月は生きられる」。東は自分の衝撃を隠し、柳に「何度も自殺未遂した貴女が、癌と聞いて動揺するなんて変だよ」と言う。

余命8ヵ月というと翌年春くらいか、柳の出産予定日は2月1日。柳は胎児の命が東の命の生まれ変わりに感じて、出産を決意。「一緒に住まない？何か手伝うわ」。二人は出産と闘病を助け合う同居生活を始め、柳がその模様を週刊誌に連載する。

映画「命」は、東の主宰する劇団に入り、20歳以上年上の東と恋愛するうちに文才を見出された柳が、彼の食道癌と自らの妊娠出産を題材にして書いた同名ベストセラー小説の映画化。

柳と東を実名で登場させ、生と死に直面した11ヵ月をドキュメンタリー風に描くので、東役の俳優、豊川悦司は体重を13キロも減量して、食道癌患者の壮絶な戦いを演じたという。



「命」
発売：株式会社 小学館
販売：東映株式会社／東映ビデオ株式会社
写真：柳（左）の赤ん坊を抱く柳と東（右）

食道癌は進行が速い

食道癌は、胃癌などと違って進行が速い。食道には周囲を覆う被膜が無いので、すぐに近接臓器の肺、気管、動脈、神経に広がるからだ。治療は、転移が無い場合には手術で癌を摘出し、切り取った食道の代わりに胃や小腸を移植する。東の場合は、転移があり手術ができない第4期。治療した場合の生存率は1年後が25%、5年後が10%以下なので、少

しでも長く生きるためには、放射線と抗がん剤の併用療法で癌細胞を叩くしかない。吐き気、嘔吐、食欲不振、脱毛など副作用も多い上、白血球が減ると肺炎や敗血症などの感染症が起こりやすい。

50代以上の男性に多い食道癌
危険因子は酒、煙草、熱い食べ物

現在、日本では毎年一万人以上の人が食道癌に罹る。その中で圧倒的に多いのは、酒と煙草

映画「命」

篠原哲雄 監督、2002年、日本

が好きな50代以降の男性。食べた物がつかえる、むせる、飲み込んだ後に痛む、声がかすれるなどの症状があれば、すぐ受診することが必要だ。しかし、何よりの予防策は生活習慣の改善で、実際、毎日、酒1.5合以上と煙草20本以上をやる人は、酒も煙草もやらない人より33倍も食道癌に罹りやすい。ところが東は、劇団では酒と煙草を手放さず、告知後も咳き込みながら煙草を続け、その上「癌で死ぬんだから煙草では死なないよ」と強がってみせるほどの酒・煙草好きとして描かれている。

先進医療もむなしく…

「NYで先進医療を受けたい」。抗がん剤と放射線の併用療法に効果が見られない東は、12月初旬、劇団関係者とともに渡米する。しかし実際は、欧米人の食道癌の多くは胃液の逆流により起こる胃癌に似た腺癌のため、扁平上皮癌が多い日本人の食道癌とは治療法も異なるので、日本人に有効とは限らない。東の場合も効果が得られず、1ヵ月後の2000年初頭、脱毛のため毛糸帽をかぶり、やつれた姿で帰国し、元の病院で通院治療を再開する。

その10日後、柳が予定日より半月早く、元気な男児を出産。赤ん坊を抱く度に「重くなったね。初めて笑ったね」と言い合う日々、東は生への執着を強くする。しかし、肺と肝臓の転移巣が一回り大きくなり、内視鏡では食道の上部にも転移があるのが判明する。抗がん剤治療の副作用による吐き気、だるさ、脱毛もひどい。咳き込み、痰もよく出る。一層痩せる。

生まれ変わりのこの子と強く生きる

2月中旬、東の癌は骨にも転移したのか、お宮参り頃には赤ん坊を抱くにも左腕が痛くて上がらない。通院治療を断念し、再び入院。遺伝子治療や免疫療法も検討するが、結局、延命のための高カロリー輸液治療に切り替える。その後の治療は、栄養補給と痛み止めのモルヒネ入りの赤紫のカクテル。東はさらに痩せて、声もしゃがれる。モルヒネの副作用の幻覚や、死への恐怖心からおかしなことを口走ったり、暴れたりの症状も現れる。

4月下旬、癌の告知から11ヵ月、東が54歳で死去。危篤近くに「最後の煙草1本」を所望して、おいしそうに吸って逝った。

ラストは、柳が母としての誇りを持って、男児とともに力強く生きていく姿を映す。民族や家族の問題から生き難さを感じていた柳が、東の癌をきっかけに命の尊さを実感し、また、癌と闘いながら彼女と男児を守った東の勇気や、二人を支えた人々の愛から“生きる力”を蘇らせたのである。

監修：東京通信病院 内科部長 ^{みや}宮 ^{ざき}崎 ^{しげる}滋

